ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　溜息が二人分、聞こえる。

　いや、正確には一人と一匹であろうか。

「……」

（……）

　太陽に雲はかかっているが、それでもお天道様は元気に地面に光を照らしていた。

　今は七月も下旬に差し掛かる頃。連日、暑さで頭がおかしくなりそうになる中、今日は珍しく快適と言っていい。

　そんな中、彼等が溜息を吐くのには理由がある。

　地面に、まるで巨大な隕石でも落ちたのかとでも言わんばかりに出来た、大きなクレーター。

　彼等は、そのクレーターの真ん中に不自然に出ある、高く細い柱の上で途方にくれていた。風が柱に吹き付ける度に、ただでさえ折れてしまいそうな柱から、土の塊がこぼれてクレーターへと吸い込まれていく。

　何故こんな事になったのか。彼等……雅也とルカリオは、そう思わずにはいられない。

　時は、数時間前に遡る。